

安城八景に見る時代の変遷

安祥中学校 3年 松本梨花

1 研究の動機

学校の駐輪場のところに句碑があったので、何の句碑だろうと思って先生に聞いた。安城八景の句碑と教えてくれた。安城八景とは何だろう、句碑は誰がいつ建てたのだろう、安城八景とあるので他に七つの句碑はあるのだろうか、あるとしたらどこにあるのだろうと、次々と知りたいことが生まれた。そのことを先生に尋ねると歴史博物館に安城八景について記載された「歴史の散歩道」があることを教えてくれた。そこで安城八景について調べてみたいと思った。

2 「歴史の散歩道」で分かったことと、さらに知りたいこと

(1) 安城八景について「歴史の散歩道」で知ったこと

安城八景について、「歴史の散歩道」には次のように記述されている。

- ① 安城八景とは、元安城東尾地区に生まれた俳人仙風舎柳月(本名、鈴木平兵衛)が、自身の80歳を記念して選定した安城が原の原風景のこと。
- ② 選定された昭和7年(1932)ころの安城は、日本・デンマークとして急速に発展した後で、柳月は自身が若かった当時の安城が原の句を詠み、画を残した。
- ③ 句碑第1号として、安城町農会館・碧海郡農会館の前に、門人たち(中碧社、嘉の恵会)が中心となって「花木野趣」の句碑が建立され、昭和11年(1936)6月14日に盛大な除幕式が開催された。
- ④ 安城八景の句は「花木野趣(はなのきやしゅ)」「葛葉稲荷(くずはいなり)」「了雲院晩鐘(りょううんいんぼんしょう)」「天草池禽(あまくさいけのきん)」「荒下落雁(あらしたらくがん)」「千人塚秋月(せんにんづかしゅうげつ)」「出郷傘松(でごうかさまつ)」「境目首折地蔵(さかいめくびおれじぞう)」であり、句碑の写真・画、句碑のある場所を示した地図とともに句の紹介が、簡潔に記載されている。

(2) さらに知りたいこと

- ① 鈴木平兵衛(仙風舎柳月)という人はどういう人なのか。
- ② なぜ安城八景の句を詠み、画を残したのか。
- ③ 安城が原と呼ばれた安城の中心部はどのように発展したのか。
- ④ 安城八景の句には安城が原のどのような風景や物が詠われているのか。
- ⑤ 安城八景の句を詠んだ場所の風景はどのように変化したか。

(3) 研究の方法

- ・ 安城八景の句碑を廻り、句碑や画に描かれた場所の状況を調べる。
- ・ 鈴木平兵衛や安城八景、安城の発展について図書や資料を読んで調べる。
- ・ 安城村・安城町の古地図・鳥瞰図を調べる。

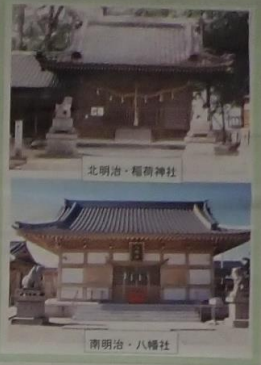
3 鈴木平兵衛と当時の安城

(1) 鈴木平兵衛(1853～1942)はどのような人か。

鈴木平兵衛は、鈴木新兵衛の長子として、嘉永6年(1853)に安城村東尾に生まれた。若くして両親を亡くしたが、廿二組の総代となり、さらに区長を勤めた。明治9年(1876)には土地改正委員となった。村会議員になること数回、地方の自治と農業の開発に尽くした。明治13年(1880)に明治用水が通水し、農林学校が設置されると事務を務めた。



大正元年(1912)、鈴木兵衛は明治(御幸本町)に移住した。それより前の明治39年(1906)に碧海郡安城町が誕生した時明治は北明治と南明治に分かれて共有財産の処分を行った。明治の神社であった稲荷神社は北明治の所有となり、南明治には、神社がなくなった。そこで碧海郡旭村(碧南市前浜新田)の八幡社を南明治に勧請しようと、大正6年(1917)に移転願いを愛知県知事に提出した。その移転願いには、安城第一区(南明治・横山)の区長などを歴任した築山兵市らとともに、鈴木平兵衛も連名している。八幡社は翌年には許可となり、着工の運びとなった。この時、平兵衛は築山兵市・吉澤正一とともに7反余りの敷地を寄付している。



平兵衛は俳句に秀でた才があり、嘉の会(花の木)・中碧社(福釜)という俳句の会の指導・育成を行っていたようで、冊子「安城八景」の詞書に、昭和11年6月14日の俳句集「柳の栞」は、結社の先輩仙風舎柳月翁の80歳の祝吟会によせられた俳句集であると記載されている。

(2) なぜ安城八景を詠み、門人たちが句碑を建立したのか。

安城町が日本デンマークとして名声を高めてからすでに時が経った。しかし、安城町はその昔、安城が原といわれていた広大な原野であった。鈴木平兵衛は80歳の祝会にあたり、安城が原の往古をしのび、自ら八景を撰してこれを描写した。

安城が原と呼ばれた荒廃の地を拓いて耕地にし、これを熟田にして、さらに多角経営を取り入れて、日本の農業の模範たるに至るまで発展させてきた。それは、困苦艱難(こんくかんなん)に堪へた勤勉な労苦の結果にほかならない。その人たちの後人である門人たちは、先人たちの徳を顕彰し、その労に謝したいと思った。

そこで師の句をもとに 現地に立って視ると、安城の地はもうそんな面影はなく、美田となり、あるいは街となっている。世の変転の甚だしさに驚愕するのみであった。この変転こそ先人たちの努力の結晶であると思い、この発展開化の跡を後世に伝えようと、花ノ木の地に句碑を建立した。

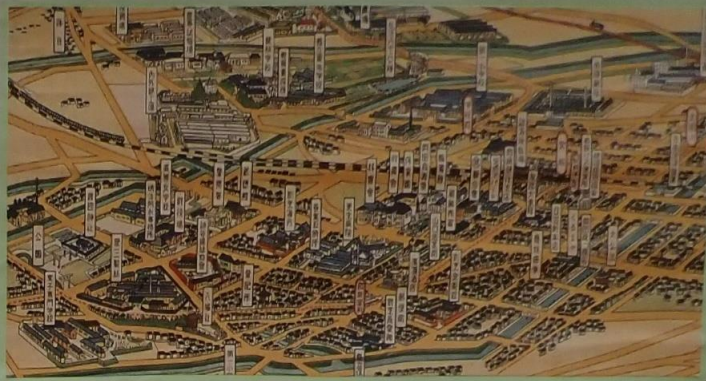
(3) 安城はどのように発展したのか。

明治24年(1891)6月に、安城村に東海道線安城駅が設置され、明治30年代になると、県立農林学校、県立農事試験場などを誘致した。また、駅の南の南明治はしだいに市街化し、明治39年(1906)には安城町ができた。明治44年(1911)に警察署が知立町から安城町に移され、明治時代末から大正にかけて、金融機関、商店、旅館、映画館が次々に建てられた。明治44年(1911)には、岡崎電燈会社安城開閉所が設けられ、大正中期にかけて各家に電気が引かれた。このころ、自転車が町全体で千台以上あり、安城自動車商会の乗り合い自動車も走るようになった。大正3年(1914)に郡役所も知立町から安城町に移転した。大正5・6年(1916・17)には、駅前区画が定められ、本町、本通町、栄町、朝日町、御幸町、花ノ木町、末広町という名前が付けられた。

大正の終わりから昭和にかけて、安城を中心とする碧海郡は、日本デンマークと呼ばれ、進歩的な農業経営を行っていたが、安城市街地には、碧海郡役所、安城高等学校、碧海郡農会、安城町役場、安城警察署などの公共施設、豊田屋、常盤旅館、安城旅館などの料理店、旅館などや、金融機関、商店や医院もあり、安城座などの映画館や娯楽施設もあった。

(4) 昭和15年ごろの安城はどのような町であったのか。

昭和15(1940)1月、安城町観光協会から「産業の安城」というパンフレットが発行された。その中に、「安城町の鳥瞰図」がある。描かれているおもな施設は、行政や農業関係の施設、市街地にある店舗、神社や史跡、初等から高等までの教育機関、昭和に急増した工場である。



中心地のおもな施設をあげると、安城駅前の東側に名鉄バス営業所、明治信用組合があり、通りを南下すると、西側一角に岡崎銀行支店などがあった。そこから南下して西の通りに入ると、町農会、郡農会、丸碧総合会など農業関係の施設や、更生病院・図書館などがあった。さらに西へ行くと、武徳殿、警察署、町役場、高等女学校、明治用水事務所などがあった。一方、東海道本線の北側には、碧海説所、第一小学校(中部小学校)、県立青年学校、教員養成所、農林学校、農事試験場、内外綿工場、県立種鶏場があった。このころ安城町は碧海郡の中心であり、農都と呼ぶにふさわしい町であった。

4 安城八景

(1) 安城八景の句碑はどこに設置されているのか。

- ①「花木野趣(はなのきやしゃ)」
- ②「葛葉稲荷(くずはいなり)」
- ③「了雲院晩鐘(りょううんいんばんしょう)」
- ④「天草地禽(あまくさいけのきん)」
- ⑤「荒下落雁(あらしたらくがん)」
- ⑥「千人塚秋月(せんになづかしゅうげつ)」
- ⑦「出郷傘松(でごうかさまつ)」
- ⑧「境目首折地蔵(さかいめくびおれじぞう)」

安城八景の地図



(2) 安城八景に詠われた風景はどのように変化したのか。

①花木野趣(御幸本町9番農協本店前三角地)

※現在 アンフォーレ南に移動

「茨(ばら)さくや なかに眼だちし 花菖蒲(しょうぶ)」

昔は池あり沼ありの荒涼とした原野で、四季おりおりの趣に富んでいた。殊に茨(ばら)の高き香り、池の菖蒲(しょうぶ)、沼の鷺草(さぎそう)、野路の桔梗(ききょう)・小百合(さやり)・藤袴(ふじばかま)・竜膽(いんどう)などが自生していて、句の題材に取り入れるものが数限りなくあった。しかし、今は全くその片鱗をとどめていない。

昭和15年ごろは、碧海郡農会館・安城町農会館・岡田菊次郎像、安城農業図書館、さらに道をはさんで東に碧海郡産業組合連合会館があり、南に更生病院があり、日本デンマークをリードした各機関が集まる安城町の中心地であった。



② 境目首折地蔵 (池浦町池西・農林高校西方交差点)

※ 初めは池浦町境目に建てられていたが、昭和57年に道路拡張の際に池西に移転。

「撫子(なでしこ)や 利生(りしょう)あらたの 辻仏(つじぼとけ)」

古き昔より伝わるこの首折地蔵尊は、仏様が人々に与える利益は石確かなものであった。刈谷より岡崎へ向かう旅人が、境目の三本松の辺りを過ぎる時、必ずたぶらかす古狐がいた。それで旅人はたいへん迷惑したが、この地蔵尊の前に来れば夢より覚めて心も確かとなったという。これもひとえに地蔵尊の御守護だと崇敬されてきた。今でも願いごとがあれば、必ず叶うこと疑いないと、手を合わせ拝す人たちは多い。

昭和15年ごろは、安城農林学校・農事試験場・県立種鶏場など、日本デンマークを支えた教育機関や指導機関の建物が立ち並んでいた。

③ 葛葉稲荷 (明治本町9番・稲荷神社境内)

「朧夜(おぼろや)や 嫁に化けたる 古狐(ふるぎつね)」

今は昔、領主より御用金の調達のため命があれば、森の松の木を伐り払った。その時、狐たちが役人に願い出て、「我々はこの葛の葉に住んでいるが、この松の木が伐り払われると住む場所がなくなるので、慈悲の心で松の木を残してほしい」と願った。役人も哀れに思っ、四株の松の木を伐り残した。それで、四本木稲荷と名づけられたという。その後、開墾のため十余名移住し、小新田、新新田、文久新田と名づけ、後に明治と改称した。

昭和15年ごろは、稲荷神社の南側を東海道本線が通り、東邦電力出張所や、日本冷凍倉庫、少し離れて北西に日本特殊繊維工場があった。

④ 出郷傘松 (新田町知立道・新田墓地)

※ 当時の松は枯れ、地蔵尊も昭和55年(1980)の区画整理事業によって位置を変えた。

「タ立や から傘松に 雨やどり」

松の老木が高くそびえ、枝は四方に伸張して、その姿はあたかも傘のようである。里人はにわか雨にあうと、走ってその木の下にいて雨を避けるのでこの名が付いた。木の下には地蔵尊のお堂があって、この地蔵尊に帰命すると、女性には泰産し、生まれた子は健やかに生育することは、釈迦の教えの示すところである。信心の心をもってお参りに行く人はたいへん多い。

昭和15年ごろは、安城町新田には多くの家が立ち並んでいた。新田から少し離れて、神杉酒造場や東邦電力出張所があり、南西に鈴木織物工場があった。



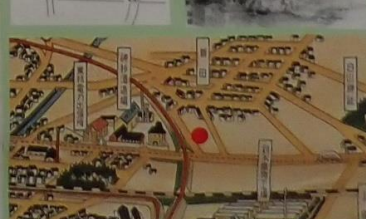
境目首折地蔵



葛葉稲荷



出郷傘松



⑤了雲院晩鐘(安城町赤塚・大乘寺境内門前の右側) 「雪降りて 安祥山や 暮の鐘」

安祥山大乗寺了雲院は安祥城主松平親忠を開基とし、勢誉上人を開山とする。もと横町にあったのを、寛政年間(1789~1801)に安祥城址に移転した。鐘の響きは林立する松韻(しょうん)に和して風雅なおもむきがある。なお、安祥城は松平氏が平地に進出して最初の拠点であり、三代にわたって武力を養い、近隣を従えた。そして、家康の祖父清康の時に岡崎に転進した。このように徳川氏にとって由緒深き城である。

昭和15年ころ、安祥城址のある地区は東尾・西尾と呼ばれていた。城址の西には第二小学校(現南部小学校)があり、北西には毘沙門天がある。

⑥荒下落雁(安城町城堀・ハ幡社境内石段前・左側) 「雁(かり)啼(な)くや 風あらしの 夕まくれ」

ハ幡社より南方に展望される区域は、その昔、安祥城の外濠であった。今でも底知れない沼田で、郷の人は「あわら」と呼び、試みに一丈余(約3m)の竹竿をさしても、底に達しないというから、その深さが知られる。稲の植え付けには、竹で簀(すい)を編んで、それに乗って行ったが、植え付けができない沼沢地となる土地も少なからずあった。ハ朔(はさく・旧暦の8月1日)の穂の色ますころになると、数多くの雁が来て稲穂をついばんで、飛び交い、群れ遊ぶ風情は何ともいえない景色である。

明治24年ごろの地形図から、東尾ハ幡社の台地が読み取れる。ここは溝崎と呼ばれる台地の先端でその南には水田が広がっている。

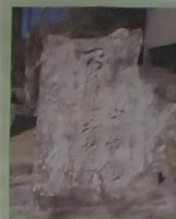
⑦天草池禽(安城町若葉・丸山組入口東南)

※ 安祥中学校の馬車輪場前に移転。

「池水(いけみず)に 狂うて鴨(かも)の あげおろし」

肥後の天草の乱(寛永14・15年)があった時と同じころ開削(かいさく)されたので、天草の池と名づけたと伝わるがどうであろうか。天保(1789~1801)のころ、領主久永石見守の発意で秋葉神社の例祭(7月28日)にこの池に船を浮かべ、船祭が盛大に行われたことがある。また、佐々木村の明覚池の大蛇が、この池を慕って来て棲んだという伝説は、この池の広茫(こうぼう)なのを想うと妥当である。鴨(かも)、鴛鴦(おしどり)などの鳥類は群がり来て遊び、鯉・鮒などの魚類は数知れず生息していた。

明治24年ごろの地形図には天草池は見られず、天草池跡地は低地で水田が広がっている。江戸時代の史料から、長さ約80m、池の面積は約900アールで、池の水は



了雲院晩鐘



荒下落雁



天草池禽



安城村の南に広がる水田に使っていた。

⑧ 千人塚秋月 (安城町荒下・向野墓地地内)

「松風の 琴に月登む 塚の秋」

文明・天文(15～16世紀)のころ、安祥城(森城)を中心として戦乱が相次いで起こったことは史実の示すところである。そのつど、たおれた兵(つわもの)たちの遺骸を敵味方の別なく葬り、塚を築いて松を植えた。これが千人塚である。秋月が輝く夕べに、さっと吹く風の中で松風の音を聴き、往時を追憶すると感慨既深いものがある。

明治24年ごろの地形図から、この辺りは、低地に突き出した台地の崎であることが分かる。それは竜ヶ崎と呼ばれる向野台地である。なお、千人塚のそばには、同じ安城合戦のときに討ち死にした松平一族の武将を葬った東条塚がある。

5 まとめと感想

鈴木平兵衛は、嘉永6年(1853)に安城村東尾に生まれ、大正元年(1912)に明治(御幸本町)に移住した。南明治に八幡社を勧請するために尽力し、他の人とともに敷地を寄付した。俳句にも秀でていて仙風舎柳月の俳号を名乗り、門人たち(中碧社、嘉の恵会)の指導に尽力した。安城八景は、平兵衛が80歳を記念して選定した開墾前の安城が原の8か所の風景を句に詠み、画を描いたものである。そして、広大な原野を農業の模範に至るまでに発展させてきた先人の労苦に謝すとともに、発展開化の跡を後世に伝えようと、門人たちが句碑を建立した。

安城八景の題材は原野に自生する野草(花木野趣)、池や田につどう野鳥(天草池・荒下落雁)、由緒ある寺院や戦死者を弔う塚(了雲院晩鐘・千人塚秋月)、里人が立ち寄る老木(出郷傘松)、信仰厚い社や地蔵尊(葛葉稲荷・境目首折地蔵)であり、どの句も趣がある。また詞書には、自然の情景、寺院・塚の由来、神社や地蔵にまつわる伝承などの記述があり、情景をより深く思い浮かべることができる。平兵衛が安城八景の句を詠んだ時には、野草が自生する原野や野鳥がつどう池は消滅し、市街地が形成され、豊かに実る水田が広がった。明治用水が開通して後の半世紀余りは、日本デンマークに連なる安城村・安城町の大きな変革・発展の時期であった。

日本デンマークと呼ばれたころ、平兵衛は50年ほど前の安城が原の八つの風景を俳句と画で描いた。碧海郡の中心で農都と呼ぶにふさわしい町安城に対する誇らしさ、失われた自然を懐かしむ思いが頭の中をめぐったのではないかと思う。平兵衛が亡くなって80年余り過ぎた安城はますます発展した。今、郷土で残すべき八景は何か、それを選んで文や写真で残しておきたいと思った。

(参考資料)

安城市教育委員会 「歴史の散歩道～アンフォーレ・ウォーク ガイドマップ～」

安城町西尾資料編集会 「安城八景」(『安城村関係石碑集』)

安城西尾の歴史編集委員会 『安城西尾の歴史』

横山郷土史作成委員会 『よこやま郷土史』

安城町観光協会 「安城町の鳥瞰図」(1940年刊行「産業の安城」・安城市図書館情報館)

